

資料紹介 松木満史が描いた「人物画」

中村理香¹⁾

Introduction of Art Document Report on Portraits drawing by Matsuki Manshi

NAKAMURA Rika

キーワード：松木満史、人物画

1 はじめに

松木満史の作品の中には、人物が描かれたものが多くある。家族をモデルに多くの絵を描き、また、本県の画家でも早いうちにフランスに渡りデッサン等を学び、裸婦を描いた作品も多い。2018（平成30）年度に寄贈された作品の中にも、フランス滞在中に描いたと思われる裸婦画の他、人物を描いた作品が数多くあった。今回は人物画を中心に紹介しながら、残された記述をもとに松木の絵に対する思いを考察したい。

松木満史（まつきまんし。1906（明治39）年～1971（昭和46）年は、青森県木造町（現つがる市）生まれで、本名は金七である。1919年13歳の時青森市で仏像彫刻を学び始めた。彫刻の修行に励む一方、好奇心旺盛な松木は当時まだ目新しかった油絵に心惹かれていく。その後彼は棟方志功という生涯の友でありライバルを得て、ますます芸術の道へのめり込んでいった。松木を本格的に洋画の世界に導いたのは、文芸雑誌『白樺』だった。武者小路実篤らが創刊したこの雑誌は、フランスなどヨーロッパの美術を伝える美術雑誌でもあり、松木は「土曜会」という旧木造町の文化サークルに参加したことがきっかけで『白樺』を学び、フランスの美術に憧れる。「土曜会」は、弘前市出身で早稲田大学哲学科に学んだ葛西新八郎が主催していた。葛西は白樺派を自認し、実際に武者小路と面識があった。土曜会には後に青森県知事となる竹内俊吉や、彫刻家として院展で活躍した工藤繁造も参加していた。松木は同郷の若者たちと芸術を語る中で、徐々に進むべき道を見出していった。1926（昭和元）年上京。上京後、武者小路実篤と交流を持った。1927年国画会に初入選。以降国画会を中心に活動する。そして1938（昭和13）年、32歳で念願の渡仏を決行する。パリの専門学校で素描等を学ぶが、戦況の悪化と息子の死により1年半ほどでの帰国。短い滞在であったが、フランスで彼が得たものは、明るい光を画面にとどめていく印象派の感覚と手法であった。1947年、単身帰省し、青森市の堤川河畔に小さなアトリエを建てて住む。1959年～1960年、東奥日報紙上に63回にわたり「青森県の素描」を掲載し、第1回青森県文化賞を受賞するなど、郷里にとどまり青森県の美術界の中心となって活動を続けた。

2 描かれた「人物」

(1) 裸婦

10代で、武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎ら同人によって創刊された雑誌「白樺」を読み、フランス印象派、後期印象派の西洋美術に影響を受け、フランスの美術に憧れを抱いていた松木は、昭和13年から14年にかけて32歳から33歳の時、ついにフランスに渡った。フランスではパリのアカデミー・コラロッシ、アカデミー・ド・ラ・グランド・ショミエールでデッサン等を学んだ。松木が特に熱心に行ったのが裸婦デッサンである。フランスでは一人のヌードモデルを大勢で囲んでデッサンしていたため、一人あたりの費用が日本よりもかなり安かったということで、松木はここぞとばかりに人体のデッサンに取り組んだという。毎週金曜日には男女一組のモデルに様々なポーズをとらせてデッサンすることもできたという。こうしたことは日本では極めて難しいことで、松木もずいぶん驚いたようだ。平成30年度の寄贈作品の中に裸婦画とともに、男女ペアの作品も含まれている。

フランスについて書かれた松木の記述がある。「フランスは美しい国である。自然の風景がすぐれているばかりでなく、フランスの人々は美しいものをつくりあげることにもむかしからすぐれた技術を持っている国民である。だから有名な芸術家たちがたくさん出ている。そして首都パリは世界的に美しい都で、いわゆる芸術の都といわれている。世界の流行はここからはじまるともいわれ、世界の人々の憧れの都で、日本から数多くの芸術家が出かけて行っている。(後略)」²⁾ 1959（昭和35）年8月1日 東奥日報 パリの思い出 感動を込めて松木はパリの印象を語っている。パリに住み、画廊をめぐり、お気に入りの絵を見るために毎週日曜日にルーブル美術館にも通ったという。

また、「A.Rodin 群像」と書かれたスケッチ^⑩（資料番号2418-313-91）があるが、これはオーギュスト・ロダンの「フ

1) 青森県立郷土館 主任学芸主査（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

ギット・アモール」(去りゆく愛)という作品をデッサンしたものと思われる。「フギット・アモール」は、逃げ去る愛を意味するラテン語である。ロダンは、1880年、新しく建設される予定のパリの装飾美術館のために入口の門扉の制作を政府から依頼されて、ダンテの新曲を表した浮彫の連作によって作り上げようとした。その右扉の下部にあるのが「フギット・アモール」である。夫の弟であるパオロと道ならぬ恋に落ちたフランチェスカ。不義に憤った夫によってパオロ共々殺され、愛欲者たちが墜ちる地獄で二人もつれ合いながら責め苦を受け続けている場面を表している。この絵はそれを模写したものではないだろうか。滞仏時代、このように世界的憧れの美術家たちの名作が、なんと身近にあり、いつでも触れることが出来た松木の喜びの大きさは量り知れない。

寄贈された資料の中に、松木によって「色彩」について書かれたメモ書きのような断片的な記述がある。松木はフランスで間近で見てきた印象派の作品の影響を大きく受けて、色彩ががらりと明るく変化したと言われるが、色彩に対する松木の思いがよく表れている文章である。また、パリのアカデミーについて書かれた記述もある。以下に記載する。

「季節のうつり変わりと共に色彩も変わっていきますが画を描くという者の心も亦変わっていくという当たり前のことをしゃべってみたいと思います。

私の知っている九州や琉球出身の画家と逢ふと 大い雪と云ふものに深い思いを寄せて 冬の北海(道)や青森を描いてみたいと云ふ気持ちを抱えている様です。小樽の画家で「目のない魚」と云ふ題材を毎年毎年くり返して展覧会に出品した人は 去年の秋に画ダイをもとめまして 遠く九州に出かけたと云ふ話を このたびある友達から聞きまして 私も深くうなづくものがありました。夏や秋の十和田なら大い雪の画家が描いているから、一つ雪の降った十和田や溪流を描いてみよう と 去年の冬に出かけましたが 色彩があまりにもとぼしくて とうとう描けませんでした。が、非常に厳しそうなものを感じまして 今更ながら雪舟の偉さが解る様な気が致しました。晴れた日に雪にうづもれた家の外に 色とりどりの洗濯物が輝いているところとか。春には野山に花がさいて、夏には樹木は深い緑になって 湖とか海岸とかに「あこがれ」を持つようになり、深い緑はやがて赤とか黄色に変化して 冬が来るといことは 毎年毎年経験済みであり、おそらく今後も同じくり返す事と思います。私の場合は画家として今かりに『溪流』を描いてみようと思った場合 どの溪流がいいかと言われ、いろいろと考えて 大なる布を持ってその写生に出るわけですが いざカンワ”スに向ってみると 自分の表現力の足りないことを なげいて帰ってくるという、やりきれない場合が多いのです。たとえば十和田の秋の景色にしても あまりに色彩が豊かすぎて描けないということもあり、そういう時は、一つ誰も見物客の全く通らない冬の景色を連想して それに期待をかけてバスなども通らない頃に出かけますが、茶褐色の強い山肌と白い雪だけで 偉(すぐ)れた画家であれば立派な作品も出来ようものにと考え 今更ながら雪舟の偉さが解るような気がしたりするのです。

いつの場合も 満足な出来ばえの作品は生まれなかった訳で、全くやりきれない気持ちになるのです。

今の私には一番的(てき)しているのが冬景色かとも思われます。しかし五ヶ月もの間も雪ばかり眺めていると雪がいやになって つい一週間ばかり前 汽車に乗って雪のない場所で下りるように決めましたら 青森と岩手の国境あたりは三戸も目時も雪でした。盛岡を過ぎても雪があるので とうとう仙台におりまして 松島の五大堂を久しぶりに眺めて描いてきましたが 平泉の金色堂なども外の囲いを取った場合を連想して見ている。」(資料番号 2418-4-89 ①)

この記述には、松木の色彩へのこだわりの強さが感じられる。「十和田の景色があまりに色彩が豊かすぎて描けない」とか、「表現力の足りなさを嘆いてやりきれなくなる」また、十和田の冬の景色を描いたときは、「色彩があまりにとぼしくてとうとう描けなかった」と記している。また、5か月も雪に閉じ込められ、色彩を求めて雪のない世界へ出かけている。いずれも色彩に対するこだわりが強いゆえの苦悩とジレンマが感じ取れるものである。

フランスのデッサンを学んでいた時のものと思われる記述は以下の通りである。

「六月十日アカデミーに行く 例のエストニアの人を見る

その態度の真剣さ 実に驚かざるを得ず

研究所の光 女々 色彩 この中から生まれるもの。美 美のための美 それ以外に美しい

ものは世界中のどこにある

灰色の中に点々動く 赤 朱 キ 草 白 女 女 女 むせぶ如き美しさよ」(資料番号2418-4-89②)

裸婦をデッサンしている時の様子だろう。研究所の光を浴びて立つ女性の美しさと色彩に対して圧倒的な感動を受けている。そこで経験した人体や色彩の美しさに対する鮮やかな感覚と思いもまた、帰国後の松木の絵に影響を与え、前段部分の色彩へのこだわりにつながっているのではないだろうか。

フランスで、西洋の芸術に間近に触れて学んできた松木は、デッサンを重視し、青森市に住んでは美術研究所を設立した。以下の記事もそのことを伝えている。「松木さんの本県画業における業績は多くあるが、何といても

第一は人を育てたことであろう。奥さんも述べているように多くの人たちが出入りして指導を受けたが、その中には小館善四郎、佐藤米太郎、渡辺貞一、工藤孝一その他の各氏がおった。このことが一時期本県が国会会とのつながりが強かったこととも関連していることであり、それらの人たちがいまの県画壇の興隆に貢献があったことは多くの知るところであろう。第二には東奥美術展審査員としての功績である。(中略) 第三としては、青森では最初ともいえる美術研究所を開設したことである。国道浦町にあった赤レンガにツタがからまっていた教会に開いた研究所では、モデルを使つての人体デッサンを指導し、常に基本であるデッサンを重視し、またその的確さにおいては、今の松木さんのどの作品を見ても理解できる。」³⁾ (1984 (昭和 59) 年 10 月 11 日東奥日報 松木満史追想「青森県の素描展」に寄せて 上 三上強二より抜粋) また、朝日新聞 1998 (平成 10) 年 11 月 25 日「北の文化」美術で、青森県立美術館の池田亨氏も、「(前略) 帰国後、満史は今純三の弟子であった浜田英一とともに、浦町の教会に美術研究所を開設する。のちに国会会で活躍する渡辺貞一、名久井由蔵、石ヶ森恒蔵、戦後八戸で活躍した水彩画家の樋口猛彦らがここでデッサンを学んだ。当時まだ珍しかったモデルを使った本格的なデッサンの講習であったという。」⁴⁾ と述べている。更に、堤のアトリエによく通っていた青森市の美術家である田村進氏も松木の主催するデッサン会に出席し、裸婦をデッサンしたことへの新鮮な思いを語っている。このようにフランスでの経験を生かして美術研究所を設立し、県内の後進たちの指導に努めた松木の功績はひじょうに大きなものであった。

① 資料番号 2418-36-42 鉛筆 (28 × 45cm)



② 資料番号 2418-36-41 鉛筆 (28 × 45cm)



「此の顔は正に師宣ならずや」とメモ有
浮世絵の祖 菱川師宣 (1618 ~ 1694) の美人画のことが。

③ 資料番号 2418-36-51
コンテ (45 × 28cm)



④ 資料番号 2418-36-27
鉛筆 (45 × 29cm)



⑤ 資料番号 2418-36-10
コンテ (45 × 28cm)



「此の人の胸のよさよ」メモ有

⑥ 資料番号 2418-36-22 鉛筆 (28 × 44cm)



⑦ 資料番号 2418-36-54
コンテ (45 × 28cm)



⑧ 資料番号 2418-313-60
鉛筆 (28 × 17.4cm)



⑨ 資料番号 2418-313-61
鉛筆 (27.4 × 19.3cm)



⑩ 資料番号 2418-313-91
鉛筆 (23 × 30.7cm)



「A. Rodin 群像」メモ有

⑪ 資料番号 2418-313-104
裸婦を描く人物 (松木か?) 鉛筆 (24 × 37.5cm)



⑫ 資料番号 2418-313-111
鉛筆 (27.5 × 44cm)



「石川五右衛門の如き顔なり」メモ有

多くの裸婦を描いてきた松木だが自身 (と思われる人物) もそこに描いた絵は珍しい。

(2) フランスで描いた人物

いろいろな人物画を描いている松木だが、フランス滞在中に最も気に入った人物画について以下のように述べている。「(前略) 私がパリで最も心を惹かれた作品は、リュクサンブール美術館にあるブリアンションの「休息」と題する 40 号位の横絵で中年の婦人の寝転んでいる上半身を描いたものである。この作品のある室の次の室にはボナールの縦の 40 号の婦人像があって、その良さも大したものであるが、私はブリアンションがとても好きで、これを見るために毎日のようにここへ通ったものだ。ブリアンションの数ある作品の中でも一番良いと感じたもので実に恐ろしい作家だと思った。(後略)」⁵⁾ (思い出の巴里を語る 松木満史) ブリアンションはマチスの影響を受けて中産階級の日常を描いた画家である。マチスは、フォーヴィスム(野獣派)のリーダーとして活躍した画家の一人であり、「色彩の魔術師」と呼ばれている。松木はブリアンションを「実に恐ろしい作家」と評し、彼が描く人物画見たさに毎日通ったというほど心惹かれていた。その絵がどんなものであったか今回の調査ではわからなかったが、ぜひ見てみたいと思う。

また、松木は『商船テナシティ』の作者シャルル・ベルドラック氏やその夫人であるプール・デル氏と親しく交わった。この人たちはひじょうに日本語を好んでいた。私はこの人たちからフランス語を教えてもらった。」⁶⁾ (東奥日報 1960 (昭和 35) 年 8 月 18 日 パリの思い出 松木満史) とあるが、スケッチの中にも、作品⑩のようにフランス語の単語や意味をメモしているものが多くあった。

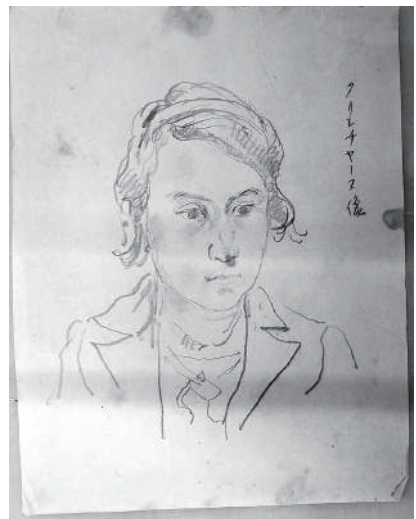
⑬ 資料番号 2418-313-12
「マドマゼル グニーズ」
鉛筆 (27.5 × 23cm)



⑭ 資料番号 2418-313-6
「ロベール少年」
鉛筆 (28 × 24cm)



⑮ 資料番号 2418-313-11
「クリンチャーヌ像」
鉛筆 (28 × 21.5cm)



⑯ 資料番号 2418-313-8
「Mantes」 鉛筆 (27.5 × 28cm)



⑰ 資料番号 2418-313-58
「母子」 鉛筆 (21 × 27cm)



フランス語の単語と意味がたくさん書かれている

<「ポレットの来訪」について>

「ポレットの来訪」について書かれた記事がある。

「フランス時代の幻の名画「ポレットの来訪」がある。

松木が渡仏をきっかけに、華やかなカラリストに転身する。(中略)色彩をはじめヨーロッパの新しい風を、そのまま本県の土壌に持ち運んできた松木の功績は、決して小さくない。滞仏時代の代表作に「ポレットの来訪」がある。30号ほどの油絵だが、カラフルな色彩の世界に光線と陰影の部分を巧みに織り込んだ、初期から中期にかけての傑作だろう。画題に出てくる「ポレット」は、近所に住む少女で、松木の部屋に毎朝のようにやって来たという。そんなあどけない少女を見つめる松木の温かい視線も、色彩の中に溶け込んでいる。作品は戦災で焼失したが、豪放な人柄とは遠くかけ離れた、女性のようにナイーブな松木の素顔までのぞかせる味わい深い作品だ。」⁷⁾(1988(昭和63)年3月12日東奥日報「青森県の美術家たち 松木満史」より)また、国画会会員で画家の喜多村知氏は、ポレットの来訪と題して「(前略)パスキンを思わせる実にいい作だった。」(松木満史画集より)⁸⁾と書いている。ジュール・パスキン(1885～1930)は晩年、淡く柔らかな光を放つ作品群を描き「真珠母色」の時代と言われ高く評価されている画家である。

この度の寄贈作品の中に、ポレットとメモされたスケッチ⑱があった。保存状態が悪く紙の端に破れや切れている部分が多く、上部や下部は濡れた跡なのかシミになっている。鉛筆でデッサンされたあとに、絵具で片仮名で書かれたメモ書きもある。構図や人物の風貌やポーズ、服装は確かに、在パリ時代に描かれたとされる「ポレットの来訪」である。色鉛筆でポレット ルゼーと書かれている。1980年に版画家である関野準一郎氏によってタウン誌「北の街」に書かれた「松木満史」の中にも「ポレット」についての記述がある。松木自身が言った言葉として「(前略) こうも言った。『画人なら油絵と言ったらピーンと頭に浮かぶ作品を1点残して、死ぬことが出来たら本望だ。俺には滞欧作<ポレットの来訪>という佳作があったが、棟方志功が是非と懇願して貰ってくれたが、残念なことに焼失した』(後略)⁹⁾」(「北の街」1980年2月号 思い出の人 思い出の風景 14 関野準一郎)と書かれている。「画人として、ピーンと浮かぶ1点として上げられる作品」これを残して死ぬことが本望だとも言わしめる作品が「ポレットの来訪」なのである。その「ポレットの来訪」の下書きと思われるスケッチが残っていたことは、誠に幸運なことである。この下書きをもとにして、幻の油彩画が生まれたことを考えると感慨深い。「ポレットの来訪」色紙 水彩 27×24cm 1959年作は現存)

⑱ 資料番号 2418-36-19
「ポレット ルゼー」鉛筆 (44×28cm)



(3) 家族を描く

<子どもたちを描く>

松木は、家族をモデルにして描いた絵が多い。作品を寄贈していただいた松木の三女のルミ氏も、幼い頃の記憶として父の絵のモデルをしたものだと言われていた。「(前略)(松木の四男)隆史さんは、『父が私にモデルをさせたのは一回あるかどうかで、たいていのモデルは姉か妹。「採集」のモチーフも。恐らく女の子ではないか』と語る。松木が描く少女は、どれも表情穏やかで温かな雰囲気をもたえている。五男三女をもうけながら四人を亡くすという不幸を背負った松木にとって、子どもたちはかけがえの無い大切なモチーフだった。」¹⁰⁾(東奥日報 2004(平成16)年6月13日 名画を楽しむ 県コレクションから)また、1973年発行の「松木満史作品集」の中で松木久治氏によって書かれた「亡兄の思い出」の中でも「(前略)17年春、柿崎さんの2階で、じっとして居ないモデルの土草樹さん、ルルちゃんをなだめすかし乍らねばり強く取り組んだ「タンデム」は、兄の世界をはっきり示した佳作でせうか。(後略)¹¹⁾と述べられている。この記述からも、子どもたちをモデルにして、津軽弁でなだめすかしながら、絵を描く松木家の愛情豊かな様子が浮かんでくるのである。作品⑲「タンデム」はこの度の寄贈作品ではないが、フランスから帰国して間もない頃に描かれた作品である。少年少女の頃の兄妹が描かれているが、柔らかな輪郭、明るい表情と伸びやかな身体表現、軽い色遣いが初夏のさわやかな解放感を感じさせ、フランスの郊外の緑の中の光に包まれているようだ。フランスに渡る前に描かれた油彩人物画の暗さや重さは、もはやここにはない。念願のフランス滞在は、それまでの作風を180度変えてしまうほど鮮烈な体験だったと思われる作品である。

また、この度の寄贈作品の中に、長男土草樹が亡くなった日に描かれた絵が2枚あった(⑳㉑)。松木は馬をモチーフにたくさんの絵を描いてきたが、そのきっかけとなったのは、長男土草樹に「馬っこ描いてける」と言われたことだったと語っている。19才という若さの長男に先立たれた松木の悲しみはいかばかりのものであっただろう。筆舌に尽くしがたい悲しみの中で、鎮魂の思いを込めて筆を走らせたであろう松木の思いの深さが伝わってくる。



⑱ 資料番号 2217-1-10
「タンデム」
油彩 (60.5 × 91.0cm)
1942年

⑳ 資料番号 2418-5-「土草樹」
墨 (30 × 40cm)
昭和23年8月7日父 満史



㉑ 資料番号 2418-5-5「土草樹」
墨 (40 × 30cm)
昭和23年8月7日
父 満史



㉒ 資料番号 2418-1-9
油彩 (40.3 × 31.6cm)

㉓ 資料番号 2418-32-74
水彩 (21 × 31cm)



㉔ 資料番号 2418-4-69 (スケッチブックの中)
墨 (26 × 36cm)



㉕ 資料番号 2217-1-17
「ラリュース」
油彩 (116.0 × 72.0cm) 1961年



㉕は「ラリュース」である。松木の集大成といわれる作品であり、代表作でもある。表面を削り取るような独特の技法を使い、印象的なタッチでいろいろな色の光に包まれるように馬に乗る人物が描かれている。松木は、数多く馬と人物をモチーフにして絵を描いている。長男土草樹に頼まれたことがきっかけで馬を描き始め、馬は松木の絵を代表するモチーフとなっていることは、研究紀要 44 号でも書かせていただいた。馬と共に描かれているこの絵のモデルは、生後 8 か月ほどで亡くなった次女のルネではないかとも考えられている。幼くして天へ昇った次女の名前を題に潜ませ、密かな鎮魂の図としたのではないかと思われるのである。その下絵と思われるものが㉔である。墨で描かれ、天にでも駆け上ろうとする馬の背に仰向けになっている人物を乗せているものである。この絵は 1959 年～1960 年に東奥日報に掲載された青森県の素描のために県内各地を回って描いた絵が収められているスケッチブックの中にあっただけだが、ラリュースの構想を練りながら描かれたものではないかと思われる。

<妻を描く>

松木は、妻のリョウをモデルにしても多く描いているが、妻や子どもたちに対する松木の思いが綴られた記述も寄贈された資料の中にあっただけ。「正月」と題されたものだが、お酒好きでユーモアがあり人間味あふれる松木の熱い家族愛が感じられる内容である

「正月」

ポリウムの足りない絵でも名画はある。しかし彫刻でポリウムが欠けていたら立派な作品とはいえない。それほど量感というものは大切なものだ。私の女房は今年四十四才で名前を量という。仲々いい名である。私は絵をやる前に彫刻をやったが 量感の乏しいため断念して絵に専念した。手足は私の倍も大きく名前のごとく量感そのものであるが結婚して以来満足な正月を送り向いたことはない。御神酒を少し用意すると餅がつけなかったり、よそ様の子どもが晴れ着を着て歩いているのに、私の子どもだけツギハギだらけの 1 枚の平常着である。「正月はゆっくり酌み交わしに来いよ」と知人から招かれても酒は飲みたいのだが、その家の子どもさんにお年玉をやれないので ぼそぼそと家で寝正月に終わることが多いが、何も量が不始末ではなく、あれもこれも皆 満史の罪である。正月の酒も餅も「米」が材料であるが、私はこの 2 品のうち酒の方を好む。餅は食わないが 自分がモツケだから、バランスは取れている。8 人の貧乏兄妹達に 10 万円ツツニギラせてみたいものだ。人間希望を失ってはだめだ。真面目くさった内容のない話をするより表面おどけた馬鹿話をして真のピリッとした話の方は人生にとって有意義である。

(「正月」 松木満史 資料番号 2418-4-89 ㉓)

平成 30 年度の寄贈作品の中にも妻を描いたと思われる作品が数多くあった。墨や淡彩で描かれた作品も、油彩で描かれた作品も優しいタッチで描かれていて味わい深い。

㉖ 資料番号 2418-32-100
水彩 (38.5 × 27cm)



㉗ 資料番号 2418-32-97
水彩 (38 × 27cm)



㉘ 資料番号 2418-313-121
鉛筆 (27 × 19cm)



㉙ 資料番号 2418-1-17
油彩 (27 × 20.8cm)



㉚ 資料番号 2418-1-45
油彩 (27 × 20.8cm)



㉛ 資料番号 2418-1-18
油彩 (33 × 23.2cm)

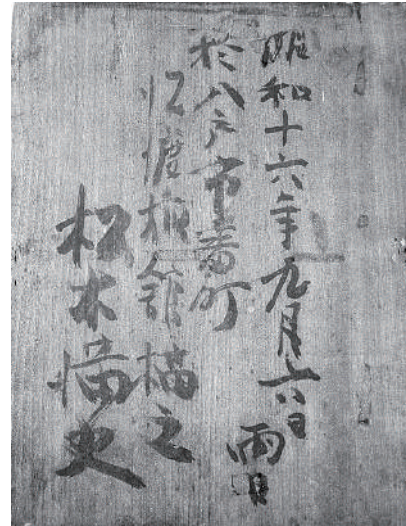


(4) 自画像

㉜ 資料番号 2418-1-19
「自画像」油彩 (33 × 23.5cm)



㉝ 資料番号 2418-1-19
(左の絵の裏面)



裏面 記述 昭和16年9月6日雨日 於八戸市番町

松木が描いた自画像は数多くないが、その一つは大きな転機となったフランスへの渡航中に描かれている。また、1960年に描かれた「馬の自画像」(油彩)は、ペインティングナイフで絵具を塗り、その後削り取るという作業を繰り返してつくられた独特な画面である。今回寄贈になった作品⑩は、裏に「昭和16年9月6日於八戸市」と書かれている。1941(昭和16)年はフランスから帰国して2年たち、第16回国画会展覧会で「娘」「室」を出品し褒状を受け、「松木満史滞仏作品集」(東奥日報社)が出版になり、「ルルの像」が第6回河北美術展で宮城県知事賞を受けるなど、一つの記念すべき年であった。板に描かれた小さい作品だが、明るい色彩の背景の中で晴れやかな表情でほほえむような自画像である。

3 おわりに

今回は平成30年度寄贈になった作品や資料の中から、人物を描いた作品に焦点を当てて紹介し考察してきた。フランス滞在中に学んだ裸婦画を中心として、家族を描いたものが数多くあり、それらに対する松木自身の思いを書いた貴重な記述も多くあった。特に印象に残るのがフランス滞在中にアカデミーで裸婦デッサンをした際のことを綴ったものである。エストニアのモデルを見て、またモデルたちを見て、「光に包まれる色彩。美のための美。それ以外に美しいものは世界中のどこにある。」という表現を目の当たりにして、その感動と美に対する衝撃の大きさが伝わってきた。その貴重な体験が、その後の作風に大きく影響したことがうかがい知ることができた。調査を深める上で大変参考になるものであった。

寄贈になった資料には、ここで紹介した人物のスケッチの他にも、戦後青森時代の県内各地のスケッチ類など、数多くの貴重なものがある。また、絵に対する思いが書かれた記述もある。それらについても今後整理しながら、更に調査を進めていきたい。

4 謝辞

貴重な作品・資料を青森県立郷土館へ寄贈し、調査に協力していただいた松木ルミ氏に心から謝意を申し上げます。また、お忙しい中査読していただいた弘前大学名誉教授であられる長谷川成一先生にも厚く謝意を申し上げます。

(注)

- 2) 昭和35(1959)年8月1日 東奥日報 パリの思い出
- 3) 昭和59(1984)年10月11日東奥日報 松木満史追想「青森県の素描展」に寄せて 上 三上強二より抜粋
- 4) 平成10(1998)年11月25日朝日新聞「北の文化」美術
- 5) 雑誌「浮彫RELIÉF」第24号 昭和24(1948)年発行 青森美術社「思い出の巴里を語る」 松木満史
- 6) 昭和35(1960)年8月18日 東奥日報 パリの思い出 松木満史
- 7) 昭和63(1988)年3月12日東奥日報「青森県の美術家たち 松木満史」
- 8) 昭和45(1973)年発行 松木リョウ編『松木満史画集』松木満史画集刊行会 ポレットの来訪 喜多村 知
- 9) 「北の街」1980年2月号 思い出の人 思い出の風景 14 関野準一郎
- 10) 平成16(2004)年6月13日東奥日報 「名画を楽しむ 県コレクション」
- 11) 昭和45(1973)年発行「松木満史作品集」亡兄の思い出 松木 久治

(参考文献)

- 中畑長四郎『津軽の美術史』北方新社 1991年
青森県立郷土館『松木満史とその時代展』1991年
青森県史編さん文化財部会編『青森県史 文化財編 美術工芸』青森県 2010年
青森県環境生活部 県民生活文化課 県史編さんグループ編『青森県史叢書 近現代の美術家』青森県 2012年
青森県郷土館 研究紀要 第28号「青光画社」考一棟方志功生誕百年にちなんで—對馬恵美子 2004年
青森県郷土館 研究紀要 第41号 松木満史研究のための序論 和山大輔 2017年
青森県郷土館 研究紀要 第42号 松木満史の初期作品の評価 和山大輔 2018年